

便潜血定性検査キットの検討

○川村 文 森川 安加里 山田 浩二 柳田 裕起 胡内 久美子 宗川 義嗣
奈良県立奈良病院 中央臨床検査部

【目的】

免疫学的便潜血反応は出血性下部消化管疾患、とりわけ大腸癌のスクリーニング検査として有用である。今回我々は、ダイナスクリーン・ヘモ（以下ダイナスクリーン）の発売中止に伴い、代替品としてO-Cヘモキャッチとクイックチェイサー便潜血（以下クイックチェイサー）の相関、感度および採便検体の保存性について比較検討を行った。

クイックチェイサーはHbに加え、トランスフェリン（以下Tf）も同時に検出可能なキットである。Tfの測定により偽陰性の減少が期待できると考え、Tfの保存性を追加検討した。また、2010年1月～4月の間にHbとTfの結果が乖離した検体について調査した。

【方法と対象】

（試薬）

- ①ダイナスクリーン・ヘモ（インバネ・ジャパン社）：D
- ②O-Cヘモキャッチ（栄研化学）：H
- ③クイックチェイサー便潜血（ミズホメディ社）：Q

（方法）

DとH・DとQの相関、D・H・Qの感度および採便検体の保存性について比較検討を行った。

1、 相関の検討

当院細菌検体依頼の便を用い、各々の便潜血反応を測定し、DとH・DとQの相関をみた。

2、 感度の検討

末梢血検体を希釈し、10ng/ml、20ng/ml、30ng/ml、40ng/ml、50ng/ml、100ng/mlの計6濃度の系列を製作し、D・H・Qの感度を確認した。

3、 採便検体の保存性

陰性便と低濃度擬似便を用いて、便採取から測定までの保存日数による反応性の変化をD・H・Q各々検討した。

【結果】

1、 相関の検討

DとH 一致率：92%（表1）

DとQ 一致率：約87%（表2）

Qの便潜血反応はHbとTfいずれかにラインがみられた場合、陽性と判定した。

2、 感度の検討

Dは30ng/ml、Hは50ng/ml、Qは40ng/mlまで陽性を示した。（表3）

3、 採便検体の保存性

Dで4日目以降ラインが徐々に薄くなる傾向があった。Hは7日間安定であった。QはHbで7日間安定、Tfは2日目以降ラインが徐々に薄くなり、低濃度では陰性化した。

4、 HbとTfの結果が乖離した検体の結果については、発表にて報告する。

【まとめ】

検討の結果、H、Q共に日常検査に充分使用可能な試薬であった。

2008年4月の診療報酬改定によりTf、Hbの同時算定が可能になったことから、当院では昨年よりTfの同時測定が可能なQを採用することとした。

（表1） DとH の結果比較

一致率：92% (23/25)		H		
		+	-	計
D	+	13	2	15
	-	0	10	10
	計	13	12	25

（表2） DとQ の結果比較

一致率：約87% (26/30)		Q		
		+	-	計
D	+	6	0	6
	-	4	20	24
	計	10	20	30

（表3）

濃度 (ng /ml)	0	10	20	30	40	50	100
D	(-)	(-)	(-)	(+w)	(+w)	(1+)	(2+)
H	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+w)	(+)
Q	(-)	(-)	(-)	(-)	(+w)	(+)	(+)